

---

# 薄い世界、

高坂翡翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薄い世界、

### 【コード】

N3300I

### 【作者名】

高坂翡翠

### 【あらすじ】

世界って、薄っぺらいと思う。でも、なによりも大きい。その事実に、眩暈がする。そんな少女二人の毎日。

「ねえ桔梗。やっぱり世界は薄いよ。」「なによ急に。まあ確かにそうね。」

## 人物紹介

登場人物

main character

トウジョウウ ナギサ  
藤城渚

中学三年生。

基本的に、親友としか絡まない。  
明るいけど、騒がしくなく、おとなしい。

リンドウウ キキョウウ  
燐萄桔梗

中学三年生。

吹奏楽部部长。

クールで、渚の親友。

sub\*character

トウジョウ ユウヘイ  
藤城悠平

藤城渚の父親。

トウジョウ ミレイ  
藤城美麗

藤城渚の母親。

## 一話

世界は、凄く薄いものだと思う。  
根拠。

そんなものは欠片もないけれど、”世界”それは、薄っぺらいもの  
だと思う。

「ここにXをいれて・・・」

つまらない授業を聞きながら、そんな事を思う。

中学の、つまらない数学。

つまらないから、聞きたくもない。

それでも、義務付けられた高校に行くために、聞きたくない授業も  
聞く。

義務付けられた。

誰に？誰だろう。

親に？兄弟に？意味もない期待を寄せる教師たちに？わからない。  
忘れてしまった。

興味ない。

自分が高校に行くことを義務付けた相手なんて、興味ないから覚え  
てない。

覚えるのは。覚えなくてはいけないと思うのは、義務付けられたそ  
の事実と、つまらない授業の内容だけ。

「渚ちゃん、授業終わったよ。」

友人の声が聞こえた。

返事はする。ただしうわべだけの薄い返事。

「渚、授業終わったわよ」

また声が聞こえる。

さっきと同じようなことを言う。

返事をする。これはさっきと違う。

ちゃんとした返事。

燐菊桔梗。私の友達。綺麗な名前。それにぴったりの整った顔立ち。鈴をころがしたような美しく響く声。成績、運動、共に優秀。完璧な女性。その完成態のような女。

「また授業聞いていなかったの？それで高校なんていけるのかしら。」

桔梗が歩けば男女問わず振り返り、誰もが憧れている。それなのに人が寄り付かない訳は、この性格にあるだろう。

「ひど。授業はちゃんと聞いているよ。」

「そうだったわね。」

桔梗はクールだ。いや、クールなんて言葉では収まりきらない。こいつの性格は、何も身に纏わないで、氷点下何度とかの海に入っただけくらい冷たい。勿論、私は入ったことないが。例えば。

「それより、お腹すいたわ。」

「そうだね、早く行こう。」

まあ、とりあえず私にはそこまで冷たくないようだが。周りには凄く冷たい。

そんな氷点下女と平凡な私がつるみ始めたのは、いつだったか。そんなことは忘れてしまった。

だが理由は覚えている。桔梗と私の性格が似ていたから。誤解しないでほしい。私は氷点下の海ほど冷たくないし、むしろ真逆といってもいいだろう。これはそういう問題ではない。

「ねえ桔梗。やっぱり世界は薄いよ。」

「なによ急に。まあ確かにそうね。」

これだ。

私は高校に行くことを義務付けられた。

桔梗も高校に行くことを義務付けられた。

最初は、環境が似ているから。それが理由で一緒にいた。

私は世界が薄いと思った。

桔梗も同じだった。

一緒にいてわかったことはこれだった。

深く共感して、深く安堵した。

「桔梗、今日暇？」

「今日は稽古。」

返ってきた言葉に、ただ、そっかと返す。

桔梗はお偉いさんのお嬢様だ。色んな稽古をして、色んな塾に通っている。

特に力を入れているのは、踊りだ。なんでも、踊っているときは全て忘れられるそうさ。

学校のことも、世界のことも、親から与えられる強すぎる重圧も。全て忘れられる。そう言っていた。踊り終わった時に感じる現実ほど辛いものはない、そうとも言っていたけれど。

「踊り？」

返ってきた言葉に、そっかと返して、また問いかけた。

「違うわ。歌。」

「わお、歌までやってるんだね。流石エリート。」

そういうと、あからさまにしかめっ面をした桔梗がいた。エリート。その言葉は、桔梗の大っきらいの言葉だ。

「ごめんごめん。冗談。」

「あっそ。」

あーあ、あなたが恋人なら良かった」

桔梗が呟いた。しかめっ面は続いている。

しかめっ面をした、その顔ですら綺麗だと感じる。女の私から見ても、綺麗だと思うその顔は、決められた婚約者によって奪われる。そういう趣味はないが、むかつく。こんなに綺麗な女を、こんなに寂しがっている女を、こんなに孤独な桔梗を、金目的のいやらしい男にとられると思うと、いらだつ。

「マジで言ってる？」

「なわけないでしょう。」

だよ。そういって、開いたお弁当に手をつけた。

自分で作ったお弁当。味が薄かった。

私の心みために、薄くて。何故？答えは決まっていた。私が作ったから。これ以外の答えも、解決方法も、見つかることはなかった。

## 一話

「きりーっ」

クラスメートの声が聞こえる。

「れーい。」

「さようならー。」

やる気のない、クラスメートの声。

今日の授業が終わって、桔梗に声をかける。

ああ、そういえば今日は稽古だっけ。

思い出して、声をかけるのをやめた。というよりも、かけられなかった。そこに桔梗がいなかったから。稽古だから、急いで帰ったんだろっ。

そのまま帰ろう。そう思って踵をかえした時、声がかかった。

「藤城さん。」

クラスで一番お洒落な女子だ。  
苦手。パツと浮かんだ言葉がそれだった。

「ちょっと、いいかしらあ」

あからさまに語尾をのばして、いやらしく笑って、キモチワルイ。

「いいよ」

軽く笑って答えた。

悪意丸出しの彼女に、なにされるんだろう。なんて、他人事のように思う。

どうせあれだろうな、めんどくさい。わかってるよ、貴女達の言いたいこと。

バカだなア。頭の中でつぶやいたそれも、他人事のようにだ。

.....

彼女たちに連れてこられた場所は、裏庭の大きな木の下。

嗚呼、なんて定番。馬鹿みたい。さっきと同じ考えが、また頭をよぎった。

「あのね、お願いがあるの。」

「なに？」

笑って聞く。私は心を表に出さないようにしている。幼いころからの習慣だ。

普段のワタシは、明るくて人当たりのいいお気楽なおんなノコ。自分でも気持ち悪くなるくらい嘘の笑顔を作って、ニコニコ笑っている。それで騙されてくれる。人間って単純。見破ったのは、桔梗だけだった。

「隣菊さん、いるじゃない？」

「桔梗の事かな？」

いやらしい笑みを浮かべたまま、桔梗の名前を出されたことが、なんとなく許せなかった。そして、この後にくる言葉も、私は許せないだろう。

「そう。隣菊さん、私達に紹介してくれないかなあ？」

「どござして？」

「だって、友達になれば、色々有利そうじゃない？金持ちの権力つて奴ウー？」

キヤハハと笑った彼女たちに、こみあげてきたのは呆れたやっぱりと、怒りだった。

桔梗は金持ちだ。だから、それを利用して近くて近づく輩がいる。そういう奴等は、決まって私に頼んでくる。そのたびに、やっぱり浮かんでくるのは、怒りよりも先にバカだなアだった。

「へえ。」

「だから教えてよお」

「やだ。」

即答だった。

友達を貴女達に渡すほど、人を信じていないんだ。それになにより、桔梗の気持ちを知っていて、あいつに人との関わりを簡単に持たせるわけにはいかない。

「はあ？なんですよ。」

「なんでって、桔梗がそれを望んでないから。ていうか、桔梗の事を紹介したとしても、あいつは相手にしないよ。」

嘘ではない。桔梗はこの人達を相手にしないだろう。当たり前だ。

「それじゃ、私帰るね」

また笑って、そこを去った。

彼女たちはしかめっ面（というより歪んでる）をしているけど、桔梗のように綺麗ではなかった。

やっぱり苦手。もう一度そんな事を思って、学校を出た。

### 三話

校舎を出て、家に向かって歩きはじめる。  
学校から家まで約15分。短い距離だ。  
もつと、長い道なら良かったのに。そんな事を思う。  
家ほど憂鬱なところはないだろう。

「ただいま。」

歩きはじめて15分。やっぱり距離も時間も縮めぬまま、家路に  
いた。  
家に入って、聞こえてきたのは怒声だった。

「俺の言うことも少しは聞けっ！」

「うるさいわねっ。私の勝手でしょ!？」

夫婦喧嘩。これがはじまったのは、中学に上がる前だった。  
理由は母さんの浮気。

離婚。この言葉は、何度も上がったけど、父さんは認めなかった。  
自分の名誉のために。

”政治家” 父さんの職業は、この仕事だった。私は国民の幸せを  
一番に考えます。そんな事を威張ってる。

嘘つき。国の為、国民の為？ありえない。  
金の為、名誉のため、なのより自分の為。それだけのためにこの仕事についている。  
ばっかみたい。

「ただいま。」

いまだに続いている夫婦喧嘩。その会場となっているリビングのドアを、空気を読まずに開けた。  
あからさまに怪訝な顔をした二人に、もう一度、

「ただいま。」

あいかわらず気持ち悪い嘘の笑顔で言った。

「お、おかえり。」

急いで母さんも笑顔をつくる。二人は、この喧嘩が私にはばれてないと思ってるみたいだ。  
残念ながら、この家はそこまで広くない。どこにいても、あれだけ大きな声で喧嘩されちゃ、気付かないわけないのに。

「私、勉強してくるね」

「ええ、頑張ってください。」

お互いに、嘘の笑みを浮かべる。普通の家族なら、こんなに気持ち悪く笑うことはないだろう。

あいにく、愛情を注がれてもいないのに、貴女を母親とは思えないわ。

一度冷蔵庫を開けて、お気に入りのチョコと紅茶をもって、リビングを出た。

階段をのぼり、部屋に入った。

必要以上のものがない、殺風景の寂しい部屋。私の心みたいに、冷めた部屋。

部屋の隅にあるソファーに腰掛けた。ソファーの前の机に紅茶を置いて、チョコを口にした。

「おいしっ。」

思わず出た言葉。甘くない、苦いチョコの味が口の中に広がる。

素直においしいと思う。口の中で溶けて広がって。おいしい！

このチョコは、昔の親友が好きだったチョコだ。

これを食べると、思い出す。

「世界は薄い、」

この言葉を。

私がそう思い始めたのは、小6の時だった。

小6の、ある日。

.....

「渚ちゃん、」

「なに？」

その日、あの子は学校に来ていなかった。

「あのね、七海ちゃんが死んじゃったんだって。」

「え？」

長谷部七海。当時の私の親友。

桔梗には劣るけど、信用できる友達だった。

明るくて、元気で、可愛らしくて。

いつも笑ってた、そんな子が、シンダ？

「なんで?」

「私も、よくわかんないんだ。」

よくわからない? どうして?

いまでは名前も曖昧な友人の言葉が、頭の奥底で廻っていた。辛くて、信じられなくて、切なくて。それでも涙は出なかった。ただただ、心が空っぽになった。そんな気がした。

なにも考えられないまま、一日が終わって、夜。私の家に、人が訪ねてきた。七海の母だった。

「夜遅くにごめんなさい。」

「大丈夫ですよ。それで用件は?」

「お嬢さんに、これを渡していただだけませんか?」

「手紙、ですか?わかりました。」

「宜しく願います」

「ええ。お気をつけて。」

お母さんが丁寧な口調で対応して、七海の母は一礼して帰って行った。

そのあとすぐに私の部屋にきた母さんは、面倒くさそうな顔をしていた。

「七海ちゃん？・・・だっけ？の、お母さんからよ」

私はそれを受け取ったのを確認してから、母さんは下に降りて行った。

「七海から・・・だよね？」

” 渚ちゃんへ ”

小学六年生の字で、七海らしいかわい封筒の上に、私の名前が書いてあった。

小学六年生の、まぎれもない七海の字。

丁寧に封を開け、手紙を取り出す。

手紙にぎっしりと書かれた七海の字。綺麗でも汚くもない、でも読みやすい、見慣れたあの子の字。

ゆっくりと、でも確実に読み進める。

渚ちゃんへ

急にこんなことになっちゃってごめんね。

私、耐えられなくなっちゃった。

何に耐えられ寝なくなったかかってというと、色々だよ。

まずね、私昔から、渚ちゃんのことを大嫌いだった。

なんで嫌ってたのかっていうと、渚ちゃん、感情を普通に表に出してたでしょ？

私、笑うのが使命みたいなものだったから、なんか、普通に笑ってる渚ちゃんが憎かった。

それで、渚ちゃんの知らないところで陰口も言ってた。

でもね、渚ちゃんの事嫌ってたのは、私だけだったみたい。

渚ちゃんが好きな皆は、私のことをいじめはじめた。勿論、渚ちゃんにはばれないように。

そんな環境に、耐えられなくて……。

ついに、死んじゃった。

苛められた事に、自分勝手な理由で渚ちゃんを嫌った自分に、耐えられなくなっちゃって。

でもね、人を嫌った、人に嫌われた。そんな人生一生かけて味わうようなことを、二つ一気に味わえたことで、なんだろう。凄く、大

人になれた気がした。

ごめんね。普通に笑ってる子なんて、他にいっぱいいるのに、渚ちゃんでごめん。

ごめんなさい。何度言っても足りないの。だって、私はきつと、これからもずっと渚ちゃんが大好きだから。それなのに、一度だけのごめんなさいで足りるはずない。でも、これだけは言わせて。

どれだけ嫌っていても、例え何も知らなかったとしても、いつまでも友達でいてくれてありがとう。

嬉しかったよ。

大嫌いだけど、最高の友達だった。

それじゃあ、バイバイ。

#### 七海より 最後の手紙

七海の字の上に、黒いしみがいくつもできた。これを読んで、初めて涙が流れた。

七海が死んで悲しい。

涙の理由の、100%のうち20%がそれだった。あとの80%は、世界の薄さ……。

いや、人と人の関係の薄さに、死ぬほど苦しくなった。だから、涙が流れた。

……

あの日から私は、世界が薄いと思うようになった。

私が七海を傷つけた。

七海が私を傷つけた。

皆が七海を傷つけた。

仲のいい二人だった。

仲のいいクラスだった。

一生の絆を誓った仲間だった。

いとも簡単に、崩れて行った。

二人の絆、クラスの絆、一生の絆。

全部全部、崩れて行った。

こんなにも簡単に、こんなにも脆くなった。

私一人のせいで、七海一人のせいで、他の関係ない皆のせいで、崩れて行った。

こんなにも薄い関係だったのかと、全てを恨んだ。

人間の絆がこんなに薄いから、きつと世界というものも、とてつもなく薄いものだろうと、勝手に決め付けた。それでも世界は大きかった。

それがとてつもなく辛かった。

そして、三年前に決めたものは、三年たった今でも、忘れることは  
なかった。

いつしか私は、心まで薄っぺらくなっていた。

唯一の助けが、桔梗だった。環境も、思いも同じ。

七海以上に、信頼できて大好きなんだ。

### 三話（後書き）

大好きというのは友達としてですよ。  
あっちの好きではありませんよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3300i/>

---

薄い世界、

2010年10月28日00時52分発行